

須坂市埋蔵文化財発掘調査報告第4集



行人塚古墳

1978年10月

須坂市教育委員会

行人塚古墳

1978年10月

須坂市教育委員会

例 言

1. 本書は須坂市立日滝小学校の校舎移転改築用地の代替地に係る行人塚古墳の確認調査報告書である。
2. 行人塚古墳は長野県須坂市大字日滝字行人塚1,707番地に存在する。
3. 本調査は須坂市教育委員会が主体となり、金井正三が発掘担当者となって行った。
4. 本調査の参加者は以下のとおりである。
〔調査担当〕金井正三（須坂市教育委員会社会教育課）
〔調査補助員〕横山康永、小山茂、山上茂治、藤沢正人、
前角和夫、松本司、山本孝司、横山邦永、松本一実
〔事務局〕須坂市教育委員会社会教育課
竹前福治（課長） 鈴木弘（課長補佐） 丸山富士代（主事） 大久保美彦一表紙題字筆
5. 遺物の整理、実測、図面の製図、掲載した写真の撮影、及び本書の執筆は金井が行った。
6. 実測図の縮尺は各図に記したとおりである。写真図版は遺物が写であるが、他はそれぞれ異なっている。
文中「（文……）」は最後に掲げておいた参考文献である。
7. 出土遺物及び実測図等は須坂市立博物館に保管してある。
また本古墳は石室を露呈させて保存されている。
8. 本調査のためにご指導、ご助言、ご協力を賜った方々は以下のとおりである。記して謝意を表す。

関 孝一（長野県教育委員会事務局文化課指導主事）
藤田国良（長野県考古学会員）
望月静雄（飯山市教育委員会社会教育係）
目黒淳茂（須坂市文化財調査員）
金井晴美（駒沢大学文学部歴史学科卒）

敬称略

目 次

例 言

目 次

1. 調査に至る経過	1
2. 環 境	1
3. 調査日誌	3
4. 遺 構	5
5. 遺 物	6
6. ま と め	8

図 版 目 次

図版一 墳丘

1. 調査前（東から）
2. 刈り払い後（東から）

図版二 遺構

1. 石室全体（南から）
2. 人骨出土状態
3. 天井石の崩落状態（玄室）

図版三 石室の遺存状態

1. 玄室東壁
2. 玄室西壁
3. 羨道東壁
4. 羨道西壁

図版四 遺物

1. 古墳時代の遺物
2. 同裏面
3. 縄文時代の遺物
4. 同裏面

1. 調査に至る経過

須坂市教育委員会は市内15の小中学校のうち、老朽化してきた10校の改築を、昭和47年度から長期計画によって進めている。その中で、日滝小学校においては移転、改築をするため、委員会は用地の斡旋を須坂市土地開発公社（以下公社と略す）に依頼した。このため公社は、現在の日滝小学校の北方約500mの地点に用地を求め、ここを新しい日滝小学校の用地として斡旋した。この用地買収にあたって、公社は一部の地主に代替地を斡旋した。その中で越辰郎氏が受けた代替地の中に直径10m、高さ2mほどもある大きな石積みがあり、公社と越氏との間にこれを排除するという約束がなされた。そして契約終了後になって、公社から市教育委員会に石積みの排除について照会があった。

調査した結果、この石積みは遺跡台帳に記載されている「行人塚古墳」であることが明らかになったため、排除できない旨回答した。

昭和53年4月、今度は越氏からこの行人塚古墳の排除について依頼があったため、学校教育課西沢と社会教育課金井の2名で越氏宅へ出向き、古墳の処置について話し合った。越氏は、「行人塚は子供の頃から知っているが古墳のような形跡はみられない、ヤックラ（畑の邪魔な石を積み上げたもの）だと思う。」と言われたが、調査の結果、それが古墳であると確認されたならば、現状保存もやむを得ないということになった。

市教育委員会ではさっそく文化財保護費補正予算を計上し、6月議会の議決を経て、確認調査を実施することに決定した。調査にあたっては小規模な確認調査であるため、調査会及び調査団は組織せず、事務局職員金井が発掘担当者となって行うことにした。

2. 環境

善光寺平東縁のいわゆる河東地域（千曲川の東側）は上信境に源を発し、千曲川に注ぐ中小河川によって形成された扇状地が展開している。そしてこれらの扇状地には小古墳が群在しており、その多くは積石塚古墳であるということで全国的に知られている。特に長野市大室地籍には500基を越す古墳が存在していることは、あまりにも有名である。（文1）

積石塚古墳とは、普通の古墳が土で築かれているのに対して、土をほとんど使わず、石だけを積み上げて墳丘を築く古墳で、この地域以外にはきわめて稀である。なぜこの地域に積石塚古墳が多いのか、早くから注目されていた。その理由については、扇状地で石が多いとする地理的条件から発生したとする自生説、朝鮮半島の積石塚との関連性や古文獻からの類推による埴田人説等があるが、いまだ決定的な説は出されていない。（文1）（文2）

さて、須坂市は河東地域の中であって、菅平方面から流れ出る鮎川、米子方面から流れ出る百々川、そして高山村から流れってくる八木沢川、松川の4つの河川によって形成された複合扇状地上に立地している。この広い扇状地は、戦前は一面桑畑であったが、現在はリンゴを中心とした果樹園

地帯になっている。

須坂市における古墳の分布は第1図にみられるように、須坂扇状地の南端を流れる鮎川に沿ったその北側がもっとも多くみられる。そこから臥竜山、坂田山麓、本郷、口明塚へと続いている。「信濃史料」によると、行人塚付近には5～6基古墳があるとされているが、現在その地点は確認されていない。これと東地区を加えて、現在須坂市には約100基の古墳がある。

須坂市における古墳の調査は、昭和32年に国学院大学教授大場盤雄先生（故人）の指導で上高井教育会が行った上八町の鉦塚古墳がその最初である。この調査では内部構造こそ確認できなかったが、重要な遺物が出土して注目を集めた。（文3）すなわち1号墳出土の四



第1図 遺跡付近地形及び古墳分布図(1:50000)

1. 行人塚古墳 2. 埴塚古墳 3. 本郷大塚古墳
4. 天神第1号墳 5. 鉦塚2号墳 6. 鉦塚1号墳

神鏡、碧玉製釧、水子貝製釧はこの古墳が前期のものであり、積石塚古墳の発生が5世紀後半以前であることが判明した。また2号墳は後期古墳であるが、ここから出土した金銅製帯金具は古代朝鮮半島との関連性をさらに強める資料となった。その後10数年間、たびたび分布調査は行われたが（文4）、発掘調査は行われなかった。

昭和40年代に入って、日本列島改造による公共土木事業の増大は遺跡の破壊とともに発掘調査の爆発的な増加を促した。その余波は昭和50年代に入って須坂市にも及んできた。すなわち昭和50年8月の県道改良工事に係る口明塚第4・5・6号墳の調査（文7）、同51年6月の工場建設に係る大塚畑第3号墳の調査（文8）、続いて同51年8月の農道改良工事に係る天神第1・3・4号墳の

調査(文9)がたて続けに行われた。その結果は、口明塚第4・5・6号墳及び大塚畑第3号墳は古墳ではなく、単なるヤックラであり、古墳として登録されているものにも、古墳でないものも多いということがわかった。また天神第1号墳からは家形埴輪、腰掛形埴輪等貴重な埴輪が出土し、墳丘の構造も特殊な上円下方墳と推定された。そして、それは5世紀前半から中葉に築造されたものと思われ、積石塚古墳発生の考えるうえで重要な古墳として全面保存されている。

以上が須坂市における古墳の調査経過であるが、行人塚古墳については「信濃史料」に「円墳、土石混合墳、径13.0m、高1.5m、半壊」と記されているのみで、全く手が付けられていない。

3. 調査日誌

8月8日(火)曇のち雨

午前9時現地集合。本日より作業を開始する。夏草と灌木の生い茂った墳丘の刈り払いからはじめる。約1時間ほどで終了。続いて墳丘の測量に入る。測量は平板を使い、50分の1縮尺で等高線は20cm間隔とした。測量と併行してトレンチの設定を行なう。トレンチは巾2mとし、南北に切断するように設定した。

午後は測量の済んだトレンチ内を掘り下げる。頂上付近は人頭大の石が多かったがすぐに終り、その下は小砂利ばかりになった。しかしところどころに直径50cmほどの石が顔をのぞかせるが規則性がない。

午後3時頃から雨が降り出し、しばらく待たせたがやまないのので午後4時解散した。

8月9日(水)

昨日に引き続き遺構の確認を行う。昨日顔を出した大きな石はさらに大きくなり、どうやら石室の天井石のようである。この石はほぼ真ん中にあるが、石の南からは須恵器片が数片出土しただけで、1mほど掘り下げて遺構は確認できなかった。このため石の北側を下げると、東側に石室の側壁と思われる大きな石の配列が表出した。しかしこの時点においては、西側は確認できなかった。

8月10日(木)

昨日に続いて石室の確認を急ぐ。西側をさらに20cmほど掘り下げるとようやく壁が表出したが、奥壁があると思われる部分はいくら掘ってもそれらしきものを確認することができない。

天井石の南側は、昨日1mほど掘り下げたが、本日さらに掘り下げるとようやく両壁が表出した。続いて袖石も確認され、両袖形の横穴式石室であることが判明した。

8月11日(金)

石室の平面実測を行うとともに、天井石が落ち込んでいない部分の掘り下げを行う。拵土はすべてふるいにかけたが遺物はきわめて少なく、土師器の小破片が数片と須恵器が1片及び人骨が数片出土したのみである。

地表面とはほぼ同レベルに達したところで散乱状態になった崩落石が終ったため床面に達したも

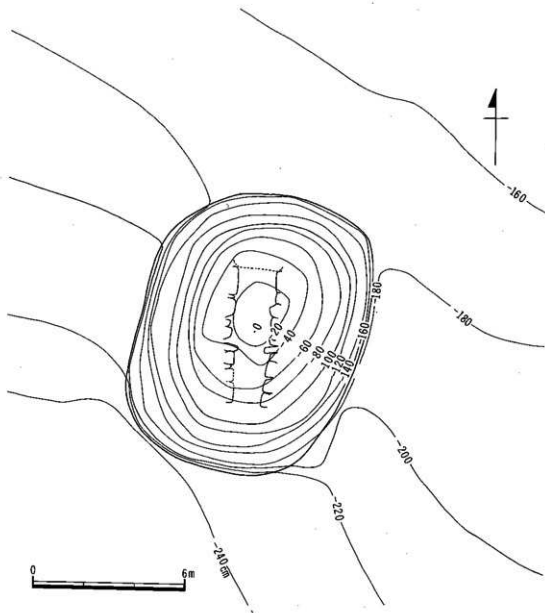
と思われた。

清掃して終了した。

8月17～19日（木～土）

掘り上げた石を搬出し、墳丘の整理を行う。墳丘整理の際、打製石斧7本と撻器を1点採集した。

墳丘を整理して、石室を露呈させて保存することにした。



第2図 墳丘実測図（1:150）

8月23日(水)晴

石室の東西両壁の実測を行い、現場におけるすべての作業を終了した。

4. 遺構

墳丘(第2図、図版一)

平面形は階円に近い隅丸方形である。長軸はほぼ南北であるが、若干東にずれている。原形は方形であったのか円形であったのか、墳裾部の精査をしなかったので不明である。

径は南北11.25m、東西8.75mを測る。

墳頂部と現地表面との比高は北辺で1.7m、南辺で2.3mを計る。これは地表面が北東から南西に向かって傾斜しているからである。

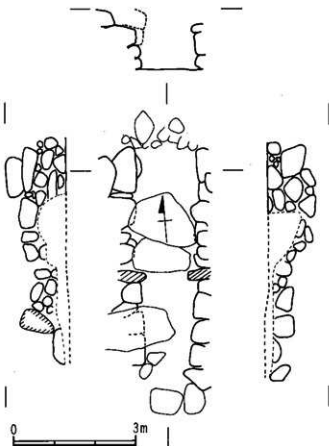
墳丘はほとんど石をもって構築されているが、規則性のある積み方ではなく、大小さまざまな石が乱雑に積み重ねられている。石は付近にいくらかでもある拳大以下の河原石が多い。

石室(第3図、図版二・三)

石室は現存の長さ約6mを計る、両袖形の横穴式石室である。主軸は北4.9度西で、南北にきわめて近い状態で構築されている。

このうち支室は、側壁の遺存状態は比較的良好であるが、奥壁は全く残存していない。側壁は比較的大きな自然石を積み重ねており、若干胴張りである。支室の規模は奥行3m、高さ1.2m、巾1.6mである。天井石は羨道に近い部分の2個が残っており、大きい方は長さ1.8m、巾1.2mである。奥行は現状からみて3m以上には伸びないと思われるし、高さも天井石の遺存状態からみて1.2m以上にはならないものと思われる。

羨道は入口がどのあたりに



第3図 石室実測図(1:100)

くのか不明であるが、現状は長さ2.2m、巾は入口に近い部分で1m、袖石近くで1.4mを測る。高さは不明。天井石は長さ1.9m、巾1mのものが1個残っているが、0.8mほど西へ移動している。側壁の上部はかなり破壊されており、玄室に比べて遺存状態はきわめて悪い。側壁は玄室同様自然の河原石である。

5. 遺物

遺物の出土量はきわめて少なく、人骨片の他は図示したものがそのほとんどである。出土状況は須恵器は墳丘の掘り下げの段階で出土し、土師器と鉄釘は玄室内覆土から出土した。また直接古墳と結びつかないが、縄文時代の石器が、墳丘の整理の段階で出土している。

須恵器（第4図、1～7、図版

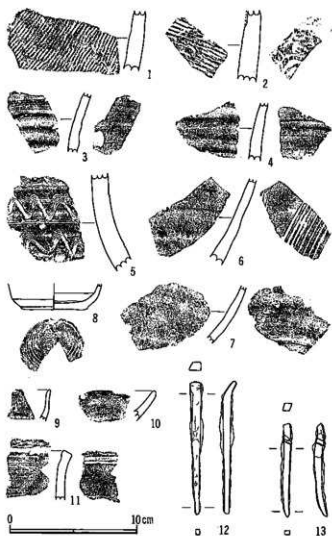
四）

1・2は比較的大きな甕と思われ。いずれも色調は青みがかった灰色である。文様は外面は平行条文の叩き目、内面は1は無文、2は青海波文の叩き目である。器壁は厚く12～14mmを測る。

3・4は壺の頸部と思われる。色調は濃いねずみ色を呈す。いずれも内外面にロクロ成形痕が顕著に残っている。器壁は6～9mmを測り、胎土、焼成共きわめて良好である。

5は器台の裾部と思われる。器壁は厚く15mmを測り、胎土、焼成は良好である。色調は外面は青みがかった灰色、内面は灰白色を呈す。文様は6本の先端をもつ櫛曲状工具による波状文である。

6は摺り鉢状の器である。色調は黒色を呈す。内外面共ロクロ成形痕が残っており、さらには内面には左下りの深い沈線が10数条ずつ刻まれている。



第4図 出土遺物（1：3）

7は壺の胴部と思われる。内面にはロクロ成形痕が明瞭に残っている。

土師器（第4図、8～10、図版四）

10数片出土したがいずれも小破片である。8・9は小型の碗形土器である。8は直径5.2cmの底部で、糸切り痕が明瞭に残っている。10は口縁部である。胎土は良好であるが器壁は薄く軟弱である。

10は口縁部であるが、器形は器台の受け部と思われる。

埴輪（第4図、11、図版四）

口縁部片である。茶褐色を呈し、器壁は薄く7mmを計る。小形の円筒埴輪ではないかと思われる。

鉄釘（第4図、12～13、図版四）

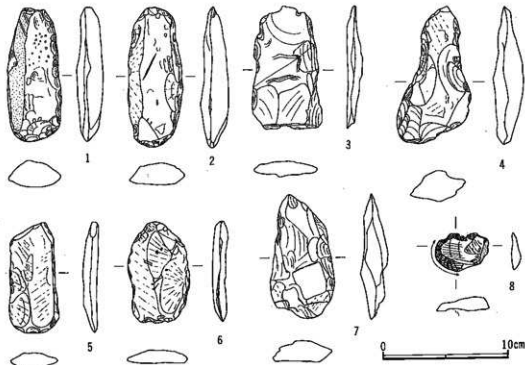
両方共同形式の鉄釘である。錆が強くややもろいが、12はほぼ完存している。実長105mm、断面は先端部付近で3mm×4.5mmの方形を呈し、頭部付近のもつとも太いところで6.5mm×9.5mmを測る。全体的には直であるが、頭部は屈折している。

13は頭部を欠失しているが、現存長74mmを測る。断面は先端部付近で3mm×4.5mmの長方形、もつとも太い部分で5.5mm×6mmの菱形を呈する。

縄文時代の石器（第5図、図版四）

墳丘の整理の際に打製石斧7点、搔器1点を採集した。いずれも付近の畑から出たものが墳丘に投げ上げられたものである。

1～7はいずれも形態的には典型的な縄文時代中期の打製石斧である。ほとんど完形であるが、



第5図 墳丘から採取した縄文時代の遺物（1：3）

3は刃部、7は右肩が欠損している。

石質は硬質砂岩が多い。

8は黒輝石製の搔器である。横42mm、縦30mmを測る。一部に自然面を残し、全体的な加工状態はあまり良くないが、矢印で示した刃部は入念な加工が施されている。石質は非常に良い。

6. まとめ

行人塚古墳の調査は、古墳であるか否かの確認が目的であったため十分な探究はできなかったが調査結果に若干の考察を加えまとめに代えたいと思う。

まず墳丘の形態は、現在は方形に近い形をしているが、墳裾部の精査をしていないため、方・円の決定は保留しておきたい。また墳丘は拳大以下の河原石で構築されているが、これはこの地方にもっと多い後期の横石塚古墳の特徴であり、墳丘の大きさも直径10m前後で、典型的な後期の小規模古墳である。

内部構造はいわゆる両袖形の横穴式石室で、大きな自然石を積み上げており、長野市の大室古墳群(文6)や同じく長原古墳群(文5)等、広範囲にみられる典型的な形態である。石室の平面形はほとんど原形を保ち、天井石も3個残されているにもかかわらず、奥壁が破壊されているのが惜しい。

遺物はすでに盗掘者によってすっかり持ち去られて、残っていたものは人骨片と図示したわずかな土器類及び木棺の釘が2本と淋しい限りである。装飾品は白玉1つ残っていないのである。

須恵器は叩き目のある1・2及び波状文のある5が7世紀代におかれ、他は8世紀以降の所産である。特に内面に沈線のある摺鉢状の6は10世紀以降におかれよう(文5)。土師器は石室内から出土したが、ロクロの使用がみられる点また糸切りがみられることから9世紀以降におかれる。埴輪が1片出土しているが、同例は大室古墳群の後期古墳にもみられることから(文6)、わずかではあるが7世紀後半まで埴輪は使用されていたことがわかる。

釘の出土は県内では珍しく、筆者の知る限りでは大室古墳群北谷支群第425号墳から20本出土しているのみである(文6)。大室の釘も本古墳の釘も角釘であるが、頭部の形態が異なっている。すなわち大室例は頭を鉄形に折り曲げているのに対して、本古墳のそれは若干平たくしてわずかに屈折させているのみである。もっとも1本だけでは比較のしようがないが。

さて、古墳の築造年代についてであるが、前々から述べているように後期古墳であることは間違いないであろうが、十分な裏づけとなる遺物がないのである。しかしながら7世紀代を示す須恵器が出土していることと、内部構造の後期の様相から、築造年代は7世紀中葉から後半ということで大過なからう。

その他の遺物が8世紀以降の所産ということは、後期古墳が家族墓的になって、追葬が行われたとする従来の説を裏づけるもので、本古墳にも複数の人が葬られている可能性がある。

古墳と直接関係ないが、縄文時代の石器が出土している。土器がまったく出土していないので正

確にはわからないが、形態的には中期のものであろう。この時期の遺跡は舌状台地や丘陵上に多いのであるが、扇状地の扇尖部から出土するというのはどういふことであろうか。水がなく石ばかりのところへ縄文人は家など作らないと思われるが、資料がきわめて少なく、本報告書の主題は古墳であるので、これ以上の論述は差し控えておこう。

「環境」の項で述べたように、近年の開発の波は須坂市へもおしよせてきて、ここ3、4年間は毎年のように古墳の発掘調査を行っている。しかし本市の場合、これらの調査は「確認」あるいは「試掘」という形をとって弾力性を持たせている。つまり従来古墳であるとされているものにも古墳でないものがあり、実態は正確に把握されていないからである。またそれとともに、本物の古墳であった場合には開発行為の変更も考えるためである。その結果は「環境」の項でも述べたように古墳であったものはすべて保存されている。このことは当市の埋蔵文化財保護が非常に理想的に近い形で行われていると言えるのであって、なんとかこの状態を維持していきたいものである。

さて本古墳もなんとか保存していきたいと考えて地主の越氏と折衝したところ、深い御理解をいただき、古墳であった場合には保存するということが話がついた。そして調査終了後の現在は保存に活用という一面を付け加えて、石室を露呈させて保存されている。畑の真ん中であって何も作れない邪魔なものではあるが、御理解とご協力をいただいた地主の越辰郎氏に感謝申しあげて筆を置きたい。

参考文献

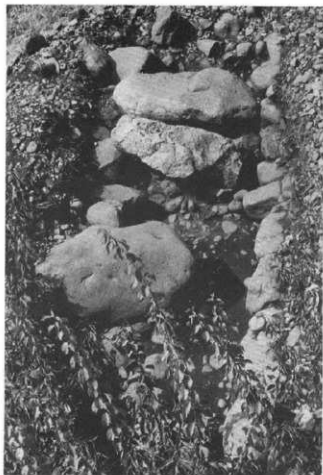
1. 信濃史料刊行会「信濃史料」第1巻考古編 昭和32年
2. 斉藤忠「横石塚考」信濃16巻5号 昭和39年
3. 永峯光一・亀井正道「長野県須坂市鐘塚古墳の調査」考古学雑誌45巻1号 昭和34年
4. 青木広安「須坂市に於ける古墳の分布」上高井教育29号、昭和47年
5. 大塚初重・小林三郎・下平秀夫「信濃・長原古墳群」長野県考古学会研究報告書 5 昭和43年
6. 米山一政・倉田芳郎他「大塚古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書」昭和45年
7. 金井正三「須坂市口明塚第4・5・6号墳確認試掘調査報告書」須坂市教育委員会 昭和50年
8. 金井正三「大塚畑第3号墳確認調査報告」須坂市教育委員会 昭和51年
9. 岡孝一・金井正三「天神第1号墳確認調査報告書」須坂市教育委員会 昭和52年



1. 調査前（東から）



2. 刈り払い後（東から）



1. 石室全体（南から）



2. 人骨出土状態



3. 天井石の崩落状態（女室）



1. 玄室東壁



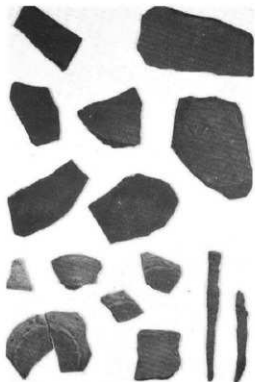
2. 玄室西壁



3. 羨道東壁



4. 羨道西壁



1. 古墳時代の遺物



2. 同裏面



3. 關文時代の遺物



4. 同裏面

須坂市埋蔵文化財発掘調査報告第4集

行人塚古墳

昭和53年10月31日

発行 須坂市教育委員会

長野県須坂市大字須坂1528-1

印刷 秀文堂印刷株式会社

長野県須坂市常盤町760

